



多摩市身のまわりの環境地図作品展事始め

前・運営委員会委員長（東京大学名誉教授） 西川 治

20周年おめでとうございます。不肖はこの大変画期的な教育的事業の発議者として、発足当初より十年余にわたる運営委員会の委員長として、市役所・学校・住民の関係各位、当運営委員会の先生方の長年にわたる並々ならぬご尽力に対して、並びに当初より国土地理院を始め環境学・地図学関係の諸学会並びに諸会社方々の親身のご支援に、衷心から御礼申し上げます。

私の専門は地理学、漢字の理とは本来玉の模様、玉は帝王の象徴、将棋は玉と王との戦いです。宇宙飛行士がみる地球こそ、まさに宝玉。「仰いで以て天文を觀、伏して以て地理を察す」（易経）。広大な宇宙の神秘的な文（あや）・模様と天意の考察、それに国土の山川草木が織りなす多彩な景勝、即ち地理を解明して国土を経営し、さらに天変地異のよりの確な予察こそ、まさに天子・帝王の天職でありました。大地に展開するこのような理念に照らして、内外に知られた当市における、将来を担う学校の優秀な生徒さん方の、知恵を絞り汗水たらして作成された多数の見事な作品を拝見するたびに深い感動を受け、より明るい将来に夢を托しております。

昭和40年ごろから多摩ニュータウンの土地造成が始まっていました。日曜日にはその視察に訪れたり、町役場では関連のヒアリングもしたり、ヨーロッパ各国で見学したニュータウンとの比較も試みていました。

予定どおり、昭和59年に入居届けを済ますやいなや、市役所から、文化懇談会への参加を求められました。メンバーは5人、老生が座長、パルテノン多摩の完成を控えて文化行政へのアドバイスを求められた。2年18回にわたる会議を踏まえて、昭和61年8月には「つくられた都市からつくる都市へ」と題する提言書を提出しました。そのころ、助役（現、副市長）さんから、それとなく用語について注意されたことがありました。やや間をおいて、はっときがつきました。「ニュータウン、そく多摩市ではなく、従来の集落を忘れてはいけない」との忠告だと。

国の政策を受け入れて旧村民方が、先祖代々の田畑山林を広範囲に提供されたおかげで、都心部から比較的近くに大規模なモデル的団地が形成されたわけです。それこそ国際的にも新時代のモデルにもなるような新天地を創生する責務があります。そうした気負いも秘めながら、文化懇以後も、乞われるままに、行政懇談会・総合計画審議会（会長）・都市計画審議会（会長）・文化財審議会・市民との環境懇談会（座長）など歴任。

この環境懇は1年間でしたが、国から自治体に義務づけられた環境法規の制定に向けて、市民方のご意見やご要望などを伺うために設置されました。そのさい私は、将来を担う幼少の市民、学校の生徒さんがたにも新鮮な眼で身近な環境を調べてもらい、より明るい未来の国土・地球の環境作りのリーダーになって頂きたいと発議、それには好適な先例があったからでした。当時、地球環境の温暖化対策に呼応して日本の文部省が打ち出した重点領域研究プロジェクトに早速、当時は立正大学教授の西川が代表者となり応募した「近代化による環境変化の地理情報システム」が幸い採択されました。それに基づき北海道の旭川市では、地球環境問題の国際会議を開催、当市のご協力を仰ぐために、北海

道教育大学の岡本・氷見山教授の絶大な協力をえて、「私たちの身のまわりの環境地図展」を企画、幸い全道から多数の学校生徒の多種多様な作品が集まり、展示会は盛況でした。

一方、全国二大拠点である多摩市では、環境政策課を中心に全市的な市民ぐるみの重要な行事として発展していることは、実に頼もしく、多摩・玉の光が日本の未来をますます明るく照らすように願ってやみません。

